

大晦日、ベートーベンの交響曲全曲演奏の会場に足を運んだ。第九の演奏が終わると同時に令和2年が幕を開いた。

主催者である作曲家の三枝成彰氏の解説によれば、クラシック音楽が隆盛を誇った18世紀後半から19世紀にかけての西欧では、「時代精神」という概念が支配的であった。ある時代・民族の知的、政治的風潮は、人間精神が完成に向かって前進する過程における、その時代の段階を示すものと考えられて、この名がついた。ドイツのロマン主義者ヘルダーによって唱えられ、ヘーゲルが発展させた。

ここでは芸術もまた、人間精

新美術 時評

近藤誠一

いが見てとれる。

人間中心主義の西欧では、芸術は人間の知的創造物として常に進歩するものであり、芸術家は創造性によって自分が生きる時代の精神を精一杯作品に表現し、それを一方的に社会にアピ

時代精神と伝統

神とともに完成に向けて前進するものと考えられた。三枝氏はベートーベンの作品は、まさにこのことを意識して作曲されており、それが現在までの西欧の芸術観の根底を成している。そういう目から見ると伝統を固守する日本の能や邦楽には進歩がないので、彼らにとってはあくまで「古典芸能」であって「芸術」ではないという。

これは、西欧文明の特徴である普遍主義や進歩史観が、社会統治つまり政治や経済の運営だけでなく、芸術の捉え方においても如実に表れていることを示す興味深い指摘である。そしてここに日欧の芸術観の基本的違

ールする。伝統は過去の時代の精神を表すものだから現在価値は低い。

これに対し日本人にとっては、芸術とは時空を超えた不動の真善美を体現するもので、その神髄が伝統である。それは時代とともに変化するものではない。芸術家は創造性を一方的に主張するのではなく、普遍的な

伝統の価値をいかにして同時代の鑑賞者に分かるように表現するかを考え、鑑賞者は作家の心に想いを馳せる。作品に体現された伝統を介して両者の心が一体となる。(近藤誠一「日本の匠」かまくら春秋社参照)。

この日欧の違いは、一昨年ハ

リで行った工芸分野の日仏人間国宝対談においても現れた。フランス人が弟子に継承すべきは技術であり、それを何に、どう使うかは本人の自由だと言ったのに対し、日本人は技術は本人が努力すれば念得できる、師が弟子に伝授すべきは伝統だと言った。芸術的創造性は人間の知的活動と共に前進すると考える西欧人にとって、師から弟子へ継承すべきは、創造力ではなく、その進化の表現に必要な技術だということになる。試しにオックスフォード英英辞典を引くと、Artとはまさに「技術(skill)」のことを指し、特に知識や美意識を表す技術だと書いてある。

自然中心で人間はその一部と考える日本においては、芸術は永遠なる真善美であり、芸術家はそれを自然から学び、自分独自の手法で表現する。時代性とは、西欧人のいう時代精神すなわち創造力の進化の一段階なのではなく、伝統という不動の本質を、その時代に合わせて表現する方法に過ぎない。だから継承すべきは芸術の本質すなわち伝統の価値なのだ。

芸術に対する哲学が日欧間でこれだけ違うのにも拘わらず、お互いに相手の美意識を高く評価し、敬意をもってきたのは何故だろうか。

(近藤文化・外交研究所代巻)